

## 「文明開化」の妖怪づくし：三木愛花『百鬼夜行 社会仮粧舞』の世界

海老井，英次  
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/15988>

---

出版情報：Comparatio. 5, pp.1-10, 2001-03-20. Society of Comparative Cultural Studies,  
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

# 「文明開化」の妖怪づくし

—三木愛花『百鬼夜行 社会仮粧舞』の世界—

海老井 英次

明治十六（一八八三）年に落成された鹿鳴館は、日本の文明国としての達成を諸外国に示すべく建築され、木造ではあるが洋風の建物としてその偉容を見せた。その後そこで開催された舞踏会やバザーによって、国内に向かつては新しい時代の到来を眼に見える形で誇示したのであった。そうした動きが新聞などによって広く報道され、当代の人々に話題を提供した「鹿鳴館時代」ではあったが、意外にはかなく時代の流れの中に呑み込まれてしまうことになったのである。当初こそ、その開館式の式辞（しきじ）で時の外務卿井上馨が高らかに宣言したように、近代化・西欧化の理想のもとに諸々の催事が繰り広げられていたが、やがて舞踏会などは他の場所でも行われるようになり、しかも次第にその内容を変えて、ついには仮装舞踏会（フアンシー・ホール）が行われるようになった揚げ句に、スキヤンダル騒（さわ）ぎまでも起こすことになり、新聞等の攻撃の的とれ、そうした脱線（だつせん）ぶりが世の心ある人々から批判（ひはん）を浴びるまでになってしまったのである。そして欧化政策の見直しとともに、明治二十（一八八七）年には鹿鳴館への人々の関心も急速に衰微していったのであった。そうした世相の中で著された一書、三木愛花仙史戯著『百鬼夜行 社会仮粧舞』（共隆社発兌 明治二十年十一月出版）は、文明開化期の日本の、いわば混沌（こんとん）ぶりを批判的に批評したものととして、興味深い言説を展開している。紹介しつついささか私見を述べてみたい。

まず漢文で四頁の「自序」があるが、「魑魅魍魎。我知其妖。飛頭娘隻眼兒。我知其怪。魑魅魍魎。世惡之。」と書き起こされて、現代はそうしたいわば伝統的な妖怪こそ居なくなつたが、新しい妖怪が出

現していると云う。「青天白日。横行官衙市府之間。啜民之膏血。以肥我腹者。官蛙之精也。舞文構罪。以恃威勢者。社鼠之怪也。柔順佞人。竊藏利爪者。豈非猫之妖乎。媚汙賺物。内懷毒心者。抑非狐之靈乎。外如菩薩。内如夜叉。是美人之魔也。口誦仏名。心思酒色。是野狐之禪也。其他沐猴而冠者。鼠首而端者。人面而獸心者。滔々天下。何之不妖怪之窟哉。世人不惡此怪可惡。不怖此妖可怖。却惡暗夜之怪。怖荒屋之妖。嗚呼亦誤哉。方今我邦。上富良吏。下重風俗。嘗不見其怪與妖。然怪所以為怪在。見而不怪。妖所以為妖。在見而不妖。焉知吾人途逢而讓路者。坐對而為友者。亦不妖怪。我頃日有感于世事。戲著社会仮粧舞之書。讀者不尤其書卑陋。而取其意所存幸甚。」と当代の「妖怪」の諸相を示し、本書著述の主旨をも明らかにしている。文末には「明治丁亥之晩秋 愛花仙史誌」とある。この序文に挿まれる形で二頁見開きの形で「徧々館仮粧舞之図」が掲載されている（三頁付図参照）。

次に目次は「百鬼夜行 社会仮粧舞」の書名の下、「目録」として左の如く記されている。

発端	夜夜剪燈話百怪	腥風導客逢群魔
第一回	千里雲程半瞬行	四方星宿一堂聚
第二回	宰相門前志士淚	書画会場老人嘆
第三回	舞踏偏為淫風媒	医薬却增患者苦
第四回	英雄頻嘆脾肉生	高僧却耽現世樂
第五回	雨窓遣閑賈稗史	旅亭驚人仮作家
第六回	新趣寄席說經濟	改良演劇誤時好
第七回	晴湖隱者釣官錄	綺樓花魁壳輕薄
第八回	陋巷中多仮顔回	烏有鄉逢賈莊子
第九回	學生說詩誤平仄	博士作文多剽窃
第十回	半月滯留記風俗	一部日記成書冊

以下これに従つて、順々に内容を紹介して行くことにする。

「発端」は「本邦の俗に百物語となん呼べる戲」、すなわち「是ハ遙かなる一室に燈火百個を点じ此方の一室に人々相集ふて互に怪談を為し一話畢るごとに之を一燈を消し話愈凄愴（モノスゴイ）に至りて燈愈滅じ終に百怪を談じ百燈を消し畢るに及びて其人必ず妖怪に逢ふ

斯く云ひ伝へられてゐる戯れを枕に、「此に説き出す一篇の物語ハ此百物語に基き社会に応有妖怪を写し出さんとすれば見る人作者が怪力乱神を語らずの格言に違ふを咎むるなかれ」として語り出されてゐる。

東京神田の祭の夜に、ある下宿に集まつた五六人の書生が金もなく徒然のままに百物語を始める。その動機として最近盛んな哲学の世界で妖魔の有無がそれぞれに説かれてゐるが、百物語をやつて妖魔の存否を確かめようと言うのである。甲乙丙丁戊己庚と怪談が進み（ここに紹介されている七話の怪談は特に目新しいものではない）、問題の百番目に当たつたのが「独醒処士と自称する壮士」で、彼が話し終わつて燈火を吹き消した途端、「身の長け八天井に届んばかりにて却て瘦せ細りたる妖怪の頭の先尖りたるに毛は羊毫を束ねたる如くに閃めき其上に細長き芦の笠を頂きたり足の方に八赤き紙の袴を穿ちたる奇異の様」のものが現れ、「独醒子」の「襟がみと細腰を引掴み」虚空遙かに飛び行くまでが語られてゐる。

「第一回」に入ると、飛行中眼を開けてはいけなさと禁じられていた「独醒子」が、やがて地に下ろされて、眼を開けて見ると、「白亜丹壁玲瓏として玉も彫みたる如く石柱鉄欄皎々として銀も磨くが如し」の別世界が眼前にあり、ナポレオンを始めとして古今東西の大人物達が往来してゐる。やがて二人の「童子」に導かれて「大王」に謁見するが、その「服粧」は「我日本にも非らず支那にも非らず又西洋にも非らず蓋し全世界の風俗を折衷せしもの」とあり、全世界の融和を理想とする開化の思想の一端を窺わせてゐる。「大王」は世界の状況を以下のように分析してみせ、「今日の如く危嶮不安（ケンノシナル）の時」はないと言ふ。

強ハ常に弱の肉を噛まんとし智ハ争ふて愚の財を奪はんとす虎視耽々として互に其隙あるを伺ひ鷲搏羊揚として共に其餌を求め表に和親通交を名として裏に残害吞噬の念を抱き口に道德文明を唱て身に欺謀野卑を行ふ是に依て到る処の人心日に澆漓に趣き月に汚濁に陥る男女同権を唱て女ハ淫逸に走り父子同権を名として不孝の児多く自主自由を称して不忠の臣多し故に孔骸野に横はつて囚徒獄に満ち戦争止む時なく葛藤解くるの日なし此晦迷否塞の世に処して独り太平を保ち無事に治まるの国ハ唯我国あるのみ

資本主義、帝国主義の横暴、「道德文明」の衰微、利己主義の瀰漫が露呈した世界の混乱を指摘し、その世界の中で「浮雲国」と言う「大王」の国のみが、全てが太平に、人民は「其業に励み芸に精し」く、「人各其似たる所に依て其粧をなし日に俱楽部若しくハ富貴者の館に会し宴会を催ふし舞踏をなし日に繼ぐに夜を以てす斯る安楽国」であると誇つた上で、しかし「世界に其名知られざれば帰化する人もなく其徳を称揚する人もなし寡人之を遺憾とすること久し」くしていたが、遂に部下に命じて「独醒子」（「大王」によれば「日本国不羈放縱の民にして禄の爲めに仕へず官の爲めに詔はず筆を援つて千言立るに成り紙を展て万章忽ち成る」と噂に聞く）を拉致させたのであり、「浮雲国」を見学の上日本に帰つて宣伝して欲しいと言ふのである。ここでは「浮雲国」が日本をも含む世界とは対照的な「安楽国」として設定されており、理想郷とされているが、それはあくまでも「大王」の思い込みであり、その実態がやがて「独醒子」によつて観察されていくことになる。

「第二回」は、近年自国（日本）で小説が盛んに行われていることを思い、「独醒子」がこれを機会に「空中旅行海底旅行」あるいは「ガルバルジが島廻り」などに匹敵する「小説」を書いてやろうと、観察を開始する。まずは「宰臣」に会見し、さらに「書家」の書画会を見らる。最初に会つた「宰臣」が「我国既に文華開け物産興り有司上に励て百姓下に楽む況や内戦争なきこと十数年外辺に寇するものを見ず宜く武を解き戒を緩べて安逸すべきの時なり是を以て卑官塵囂を此地に避け時に出で、政を聴くのみ卑官此国を治めて既に此の如し誰か復嘴を容るゝものぞ抑亦西英仏を凌ぎ北強露を払ひ支那を怖れしめ米利堅を伏さするの術も亦皆我方寸に在り」と「傲慢不遜の直言」を放つたので、不満を覚えた「独醒子」は反論する。

今閣下の国ハ無事太平なりと雖も小生私かに怖る其無事太平の外面皮相たらんことを有司上に励むハ若し夫れ罷免を恐るゝ為めなれば如何ん庶民下に不平を鳴らさざるハ若し夫れ言論に自由なきが為めなれば如何ん外辺に寇するものなしと雖も一たび鬻を外邦に起せば彼に八百万の貔貅千百の鉄艦あるを如何せんとの疑問をぶつつけたところ「宰臣」はそれを「少年客氣」の論だと



決めつけ「老成」の要を論したが、「独醒子」は反発して別れる。

ここでは西に「英仏」、北に「露」、そして「支那」や「米利堅」に囲まれているこの国が、日本と位置を同じくしていることが注目される。そして早くも「老成」ぶりを誇る暢気な政治家の見なす「無事太平」が「外面皮相」のものに過ぎないとする「独醒子」の見解は、当に日本の実態を示すもの以外ではあるまい。

次に「王偽之」「投機昌」「薄楽天」とか「山辺の馬鹿人」なる書家の書画会に入場してみるが、芸術とは程遠い実状に呆れて酒を飲んでると一老人に語りかけられ、それによって書画の世界の実状を詳しく知ることになる。

「芸よりも自慢がはげしく」、「詩を作るかと思へば大抵八古人を踏襲（マネスル）するか剽窃（ヌスム）するかの中の歌を詠むと聞けばてにをは計りやかましくて理屈ツぼくなければ素湯を呑む如し其癖慾の深き事八飽くことを知らず或八師匠の年忌に托せ或八名広を口籍とし時々書画会を催ふして金を集むるの工夫をなす其狡猾なること恐るべし」で、「文人社会と交際を致しますと表向八風流々々と申しましても右左なにやかやと名を付けて取られるので閉口致します」。「近年八書画を愛すると云ふても真に見分けをつけて愛するで八なく大抵八流行の為めか他人の評判を聞ての上のみそれも宜とした処が贗物と本物の差別なく真赤な贗物をレイくしく床に掛けて折角立派な坐敷を汚し主人の威光を落すのも知らぬ八実に憫笑に堪へませんソレに尚ほ可笑き八正何位とか何々官とか高位高官の人の書たもの八悉く名筆なりと思ひ争ふて之を額とし幅にするに至りて八棒腹絶倒の至りと云ふべし」と言うものである。

「第三回」は、外務大臣の秘書監よりの招待状に接して徧々館に催される夜会・舞踏会に参加する。貴紳某伯の夫人と舞踏をすることになる。徧々館が鹿鳴館のもじりであることは明白であろう。鹿鳴館の名の由来は、井上演説では井上自身の命名ということになっているが、実は井上の友人中井弘（または弘蔵）の進言によるもので、出所は『詩経』の「徧々鹿鳴、食野之苹、我有嘉賓」の一句によったものであるが、「徧々」館はまさにそれをもじつてのものであり、ワンワン館とかニヤンニヤン館と言うに等しい名である。

此国の風俗八他人の女房と舞踏するも曾て怪むものなきと聞けバ

唯交際を厚ふするに八憚ることなかるべしとそれより互に手を携て舞踏を初めけるに他の人々も各手を執り合ふて此方彼方に舞踏を催ふし

て後、舞踏が終わり食事を終わり、やがて散会の時になつて別れの挨拶をした「独醒子」に某伯夫人は、「今夕ハ妾と共に導く方に至り給へ尚ほ残る物語りを盡し侍らん」と誘う。

云ふ様のなにとなく淫猥の風なりければ独醒子誠に案外なる心地して泰西諸邦にて貴夫人などが一場に会し処女にまれ夫ある身にまれ己が好む男と手を執り合ふて舞踏を催ふす八只管交際を密にする為めにして之を尤むるものもなく之を怪む人もなしこハ一般に宗教の支配する為めと慣習（ナラハシ）の自然よりして男女相ひ抱き合ふも曾て淫猥の情を起すことなき為めなり然れども是れよりして不義姦通の媒を為すことも往々にして無きに有らずと聞くに此国ハ宗教と云ふものが人心を支配する程の力なく又男女相ひ逢へバ忽ち色情を催ふす慣習なる処へなまじひに泰西文明国の夜会など云ふ事を写し来りし為め其弊害言ふべからざるものありて我々如き外国の羈旅人と僅かに一夕の交際より直ちに有るまじき様子を為すハ何如にも苦々しき事なり

ここで「此国」と言っている「浮雲国」がその内実からして、当代の明治日本の実状を写すものであることに、もはや疑問はないであろう。舞踏会の参会者の中に迷惑そうな顔をした人々がいたが、交際のために仕方なく参加していたようで、いつか自分が主催者になつて会を催すとなれば莫大な経費もかかり「月給」などを当てにしては足らないのは明らかである。宗教の力が弱く、「色情を催ふす慣習」云々も日本人のあり方として認めざるを得まい。舞踏会場の庭園で恋を語らつていた若い男女の行方知れずの件を翌日の新聞で知り、「我こそ今業平なり今の小町なりと自ら云ふもそハ唯口の上のみにて九十九夜の誠ハ愚か歌一つ詠むことも知らぬ軽薄の公子が一言の為めに身を寄する姫の心もうたてく此都の風俗ぞ思ひやられぬと独り太息をつ」いている。「自由結婚」の言葉はあるが、それとは程遠い男女の仲であり、恋の言説も古歌そのままの古典的言辞によつてしか表せず、恋の逃避行も「道行」として報道されてしまつてゐる。

その後風邪をひいた「独醒子」は「此都のドクトル今扁鵲先生」の

診察を乞うが、風邪なのに長い時間待たされたあげくに「こじらすと云ふとチブスに成るかも知れぬ薬を上るから之を呑んで寒ひ思ひをせぬやうに鶏卵湯（タマゴユ）でも呑んで寝るがよい」と云われる。他の患者が嘆いてゐるように、長時間待たされて「却て病気を重くする心地」にされたり、医者が西洋語と漢語とを交えて、患者には分からない話をするので「通辞」でも雇わないといけななどと揶揄されてゐる。

「第四回」は「烏有野」に於ける「関羽義経の名将あつて之を号令し張飛清正の豪傑ありて之を率ひ正成孔明の謀臣あつて帷幄に参するに相違なし」と思われる陸軍の大訓練を見学して「陸軍の盛なる」に感心したが、その夜の料亭で武官の自慢話を聞くと、実は「酒に強い」「芸者を攻略した」の話であり、呆然とせざるを得ない。次の日「宗教大演説広告」の「引札」を見て、参加してみる。

演題は、仏教の改良せざるべからざるを論ず

印度哲学

基督宗の心中に入る

如來の説

討論題

国教に八何宗を取るべきや

東田 水道

天竺 良仁

飛架 行蓋

大滝 小村

と並んでおり、まず東田水道師が演壇に昇り、「近來基督教の次第に内国に伝播すると同時に仏教の次第に衰へんとするハ諸君の既に御承知なさる処で御ざりませう而して基督教の力を得て仏教の勢を失ふハ基督が正教で仏教が邪宗かと云ふに決して左やうで御ざらぬ」として、その後「宗教の今日に必要な所以」を論じ始める。

「数年以来政治ハ頻りに改良の途につき欧米各国の法度文物を採取して立法にまれ行政にまれ次第に善美に趣きます若し宗教と云へバ益々衰ふる計り今日の有り様でハ殆ど無宗教と云ふも不可なき有様に陥りました」「現在我国にハ宗教の腐敗した為めに人心を感化するものなく政府で何程罰しても何程注意を加へても続々として後からく」と罪徒が出ます、その故に宗教は必要であるとする。そして「仏教の腐敗せる処を改革し政治と相ひ伴ふて無形の方を引き受ける丈けの力を出さなくてはなりません」と説く。続いて演壇に上がった哲学士天竺良仁は、「仏教の起原」を説き、「西洋の哲学」も「支那の哲学」も仏教が入つてから開けたとして、「仏教ハ基督に勝る」と結論した。

飛架行蓋は「基督教の我国に入るハ所謂獅子心中の虫なり」と説き、大滝小村は「南無阿弥陀仏さへ忘れざれば則ち如来が来て極楽に導く」と述べて、その後の討論では仏教派・基督教派の「罵詈謗」に陥つたので、「独醒子」は「宗教の改革をする大任ハかゝる卑劣なる小胆にてハ覚束なし」と中座してしまふ。そして会場で偶々隣席だった「宗教熱心家」の男を翌日尋ねた彼は、そこで主人にむかつて盛んに「詔言(ヲベツカ)を呈する」男が、昨日演説していた東田水道師であることに驚かされる。「独醒子」は仏教の「改革案」を尋ねるが東田は言を左右してあかさず、翌日東田宅まで出向いた彼に師は酒を勧め世上の物語をするのみで、「年二八許りなる嬋妍阿娜の少女なり雲情雨思目に頸はれ嬌軀痴情趣に知らる」美女を囲っていることを知つてしまふ。「此国の人種の皮相表面の仮粧甚しきに驚く他なかつたのである。

「第五回」は貸本屋から借りた書物を基に文学談義が繰り広げられている。「新馬琴」の「換骨脱胎、から草摸様」、「今為永」の「脚色ハ西洋、訳書ハ東洋、花ごよみ」、「賽一九」の「花柳ふざくり毛」を借りるが、「今為永」の「花ごよみ」を開くと、その序文に次のような小説論が記されている。

小説ハ美術なり故に読者をして身其時にありて其事を見るの思ひあらしめざれば真の小説とハ云ひ難し支那人の詩を評する語に有聲の画と云ふことあり小説も亦有聲の画たるに過ぎず然れば文章華美なりと雖も実を失ふハ悪し脚色巧妙と雖も真を失ふハ悪し老若男女巻中に出づるの人物悉く天真爛漫の趣を得て読みながら喜怒哀楽の情に堪へざらしむるを真の小説と云ふ支那の羅貫中が水滸伝の如き其人物を写すに一人ハ一人の趣あり百八人ハ百八人の趣ありて其人物の軀度言貌躍々として眼中に顕はる又セキスピーヤの文字優美(スグレル)章句悠揚(ケダカイ)にして自ら人を感動せしむる如き皆小説の真趣を得たるものなり而して其近きハ日本の為永春水最も其旨を得たり僕特に春水の著を愛して私かに之に倣ひ近頃一書を著はし名けて花ごよみと云ふ未だ羅貫仲セキスピーヤの妙に至らざるも庶幾くバ春水をして知己を黄泉の下に称せしめんか

とこれは「実」と「真」とを尊ぶ写実の論であるが、「独醒子」はこ

れを「傍若無人の広言」と退けている。それでも本文を読んでみるが、「半分ハ論説めき半分ハ新聞の雑報めき為永の分子ハ少しもなし」の代物で呆れた「独醒子」は、本を抛ち次に「から草摸様」を読んでみる。馬琴の「仮声」を使つていても、実に「絶倒の新馬琴」であると驚く。最後に手にした「ふざくり毛」は「少しハ可笑き所もあれど無下に卑ふして読むに堪へず」「日本の一九が膝くり毛などハ滑稽にして卑からず諧謔にして俗を傷らざれど此国の賽一九ハ半九にも覚束なけれバ之を中途にして止め」ている。

「第六回」は「経済と云ふこと」が流行しており、「経済百談」という寄席が開いていたので入場してみる。「是れハ日本にて流行の未來記にでも有りさうなる趣向にて中通りの落語家(ハナシカ)五六人にて毎夜々々経済にかゝる落語を一二席づつ務め半月の換りまでに(寄席ハ同人にて十五日間出席し半月にて他の芸人と換はること総て日本の東京に同じと聞けり)丁度百題を話し了ると云ふ趣向なり而して楽屋中にハ傍聴速記法を以て一々筆記する人あり百題了るに及べバ即日之に印刷して発売する都合にて其寄席ハ常に大繁昌なり」の寄席で「華族の情を写した落語」に感心したが、真打ちの続き物の最中に居眠りをしていううちに話は終わってしまう。

翌日は新聞で評判になつてゐる「改良演劇」に行つてみる。「西洋の脚色を換骨脱胎(カキカヘテ)して此国の事に作りしもの」で「改良演劇」の所以を聞けよ

此比ハ頻りに社会の改良論盛んにして風俗と云ひ教育と云ひ演説新聞に説き立てること囂々たれば終に演劇改良と云ふこと起り従来の演劇ハ脚色が卑賤にして主意猥褻なれば宜しく高尚なるものに改むべし然らざれば活歴史の名に背き勸善懲惡の実なしと甲論じ乙説きやがて演劇改良会と云ふこと始り其会にて作りたる演劇を此新榮座にて演ずることゝなれり左れば其脚色の筋書ハ新聞に出でざる中より処々に大評判となれり

さて改良演劇を鑑賞した「独醒子」は「此演劇ハ中々高尚にて且つ意味ありげなる脚色なれば之を従来の演劇即ち日本のお染久松とか白木やお駒など云ふものに比ぶれば改良に相違なし」と認めている。しかし彼が不審に思ったのは見物に頻りに欠伸するものあり居眠りするものあり中座するものあり、見物人も少なかつたことだ。旅館の亭主

に言わせれば「先づ見物を改良する工夫」が必要だとのことであった。「第七回」に入ると、都会の暑さと喧噪に疲れた「独醒子」は郊外の湖に遊んだが、そこで夥しい数の隠者が魚釣りに興じているのを目にする。釣りをして居る人々のいずれの籠にも魚は入って居らず、この湖には魚が居ないと言うし、釣り針がついていない竿で釣っていることがわかってくる。何を釣るのかと尋ねる「独醒子」に釣人は「マア鯰に似たやうなものを釣るのです」と答える。帰って亭主に聞くとそれは獵官の姿であると言う。

此国で八一時八仕官を望む人が沢山出来種々の弊害を生じたる処より政府にて八仕官を望む人八卑んで採用致さず成る丈け下に在つて行の正しい君子とか隠者とか申します人を尋ねて採用いたします処より仕官を望む人八新たに工夫を致しまして進上ものや諛辞をつかつて貴顕の門に至り腰を折り髻の塵を払ふより寧ろ湖水の辺などに隠者を粧ふて御採用を待つて居た方が上策なりと考へ一人が為れば二人が仮真。二人が為れば三人が仮真とうく、只今のやうに大勢出かけるやうになりました尤も魚八釣ても釣れなくともよろしいのに鉤が有つて八藻へ引つかゝりて面倒だと云ふ処より何れも鉤を付けません

翌日は幽邃の地「幽山」に場所を換えてみたがそこにも「朱買臣」、「寧戚」、「仙客」、「隱君子」など「仮粧の隠者」が沢山おり「俗氣自ら満ち」ているので「他人をして我を見せしめバ亦偽君子贗隠者と誤らん」と覚えて旅宿に帰る。

その後「風流を以て自ら任じ花柳を説くを常」とする「風月子」に誘われて、「西洋館」という西洋料理店に入り、酒が進むに従い風流の話になった。風月生の言う。

貴国の棟京に八天下晴れての遊廓吉原と云ふ所が有つて古より有名なる花魁が沢山出で物の本に記して有り近年も東京新誌吾妻新誌など云ふ風流の雑誌が有つて花月の艶聞を伝へ水天の閑話を説くさうですが我国も昔八随分達引意気地の強よかりし花魁も有りましたが今八人情の仮粧計りに傾きたると共に花魁の品格と云ふもの八悉く廃し外面八花魁々々と称し虫も殺さず人にも逢はざる如き様子をなせど其内情に立ち入れバ歌と八「かき送る文もしどなき」とか「春雨にしつぼりぬるゝ鶯」とか云ふ歌と心得、香

を薫と云へバ線香を火鉢に立てる事と思ふ徒のみにて又客に薄情にして欺て金を貪る八知れど昔日本に有りと聞く千金に心移さず富貴に情を傾けず三叉の烟と消えたる高尾其ものゝ意気地の如き八絶て聞くことまれなり

近来の客も亦衰へたりと云ふべし能く風流なるを得ず能く真実なるを得ず常に妓を欺き倒さまに金を得んと欲するもの多し會て貴国の愛花仙史が記せるものを見る左の下話あり

と愛花仙史の一事を話し、それに応じて「独醒子」も「日本にも同様な話がいくらも御ざいます」と昔の花魁の挿話を語る。そして二人で花柳場へ乗り込み、そこで「独醒子」は銅貨に「鍍銀粉」を塗つて花魁を口説いたが、その花魁が後日を約束して、その証に「ゴールの指環」をくれたが、それが実は「贗造ゴール」であることがわかる。「君子を欺くに道を以てすと今にして古人の我を欺かざるを知る」と「独醒子」は嘆く。

「第八回」は通りかかった「陋巷」の「棟割長屋」に「一簞食一瓢飲」「曲肱枕之樂在其中」と看板を掛けた一戸を覗いてみると、中に机と「書匣」があるだけでその机上には唐本が積んである。この世捨て人の曰く

正人退ひて諛者進む先王の道を祖述しても到底いけませんドウモ無学にして不才僅かに西洋の話を聞きかぢりて之を我国の實際に行はんとす故に人心八日に夷狄に陥り風俗八月に澆季になります一鉢西洋の教八所謂霸道で互ひに欺き共に傾け動もすれバ權利と云ひ法律と云ひ悉く人情と云ふものを捨てたれば常に争闘のみ多く宛も禽獸の集合したやうなもの先王の教即ち王道と云ふもの八左様なものにあらず先づ庠序学校を設けて天子より庶人の子に至るまで礼樂射御書数を教へ又明德と云ふものを明にします其明德を明かにするに自ら順序が有つて即ち格物より治国平天下に至る此王道即ち先王の教を以て天下を率ゆれば天下が自然に治り人々道徳を以て交る故に戦争など云ふことが有りません又今日のやうに租税を重くして八衆庶(タミ)の行きたつ筈がありません若し夫れ今日に井田の法を起し上下を憐み下八上を尊ばゞ堯舜の治首を恃て望むべし古堯舜の初めて此統を垂れしより文武周公

之を續ぎ戦国の世に及んで我夫子之を以て天子を濟はんと欲し陳蔡の野に飢恒魁の爲めに苦む孟子私かに淑して之を思子の門人に受け梁の恵王に説て合はず其後中る微なりしが河南程子出で再び其統を尋ね朱熹之を繼で王の道又顯はる此道の尊き此の如し然るに之を捨て夷狄の法に倣はんとす亦甚しき誤りならずや

男女同権の説出で女風大に乱れ姦淫猥褻至らざるなし父子権を同ふすの論を立つるものあつて天下に不孝の子多く民権を唱へ憲法を望む者出で国に不臣の徒多し是れ皆夷狄の法によるの弊なりもう一戸の主は枕にしていた瓢から欠けた筆洗に注いだ酒をすすめたが、「何にの爲めに來りしか」と尋ねるのに対して「妖怪の爲めに攫らはれて來りし」とは言いにくく、「独醒子」の答は、「我日本で八頻りに外邦との交通を開き政府にて八留学生を各国に派して其文物制度を習はしめ民間に八子弟を遣り自ら航して其商業工作を視察し來らしめ盛んに人才を作り事業を拓めり是を以て僕八此國に來つて其風俗人情を察せんとするなり」というものだった。すると主人は

天地ハ一逆旅のみ何ぞ然かん力を尽すを用ゐん日出て起き日入て寝れば足るなり人才と雖も千歳の寿を保つ能はず工業を作すと雖も死する時八身に與なはで天下ハ放任して自ら治まるべし畢竟法律などと云ふものが有ればこそ罪人と云へるものが出来るなり功名と云ふ事が有る故に人々汲々として苦めり富貴を欲する爲めに利を争ひ戦争を起し終にハ永らふべき命を自分より縮めるなり權衡（ハカリ）がある故に其貫目を盗まんとする人ありされバ賢人とか聖人とか云ふ人が出て種々の教を作り事を設けし爲めに人間世界に煩雜なる用事あり唯何事も生れたまゝに任せなバ少しの粉雜なることなからん

これを聞いて「独醒子」は「古き莊子の仮声に是れ亦老莊の偽ものならんア、仮粧の多き國なるかな」と逃げ帰る。

「第九回」は滞在して一月近く経つた頃の事と設定されている。此の都にて文章家の評判ある「姦怠子」に人の紹介を介して訪ねて会つたが、「近世文章集」中の「春宵夢」という文章を読んでみたところ、何処かで讀んだ事のあるものであると思う。そして末尾に「仙史氏曰」の文字が残っていたので日本の愛花仙史の作であり、その剽窃であ

ることを見破る。

我日本とても此の如きもの多し口にハ多くの門弟ありと誇り詩書を乞ふものありと誇り又自作の詩文なりと刊行の冊中に載すれど門人ハ僅かに十五六人あり詩ハ一句ハ杜。一句ハ李。其半ハ唐。其半ハ今代の詩を作り古文とハ如何ん時文とハ如何。金石文字ハ如何。上書牀ハ如何と云ふことも知らず甚しきハ小説者流の文を古文と思ひ併四儷六（ツイクノブン）を古詩と思ふの徒あるに至る独り姦怠子先生を尤むべきにハあらざるなりと嘆一嘆して已みぬ

「第十回」では、故郷の事が頻りに懐かしく、歸國の事のみ心に祈る中で、「独醒子」は左の記録を作成する。

一 此國政党的模様 政党は衰えて単に懇親会を行うのみである。「若し数年前に政党の盛なりしより引續きて目覚き運動ありたらんにハ此國の政党ハ余程立派なるもの立ち居たらんに其然らざる処を見れば矢張り仮粧政黨員の多かりし爲めならんか」とは、いつに変わらぬ日本の政党の姿であろう。

一 此國新聞紙の模様 都下の新聞の主義は三つに分けられるとする。その一の「王權主義」は、政府党新聞と評するが適當なもので、「世間にて政府へ向て不平不満を云ふことに一々之を弁疏するを己れが任とせり」「兎角無事太平を粧ふを務めたる故に評判よろしからず」。第二の「中立主義」は政府の事などへハ口を出さざるを務めとしており、「狡猾主義」「商法主義」で「其論ずる所ハ極めて大仰なる事極て宏大なる事のみにて初めハ世人も面白し」と思ひしが人智が少しく進んで來れば瞞着手段の新聞ハ自ら力を失ひ今にてハ大に声価を落せり是も畢竟仮粧の論を根拠といたせし爲めなり」と言うものである。

第三の「民權主義」は、「此主義を取るものハ先づ此都にて評判のよき種類なり然れども政事新聞なら政事の事を何処迄も論ずればよきに時々哲学とか小説とか云ふことを立派に論じ却て其専門家より笑を招ぐことなり蓋し是も我れこそ八百事に通曉せりと仮粧せるよりの誤なり」とされる。

一 此國外交の模様 「此國の今日に最も注意すべきことあり兵備の如何んと云ふことは是れなり今此國の外交ハ常に和親を維持

したれハ外に向つてハ少しも兵備を要せざるの状をなせり然るに今日ハ最も大事の時に当れり則ち此国が魯西亜の強鷲が爪を摩き居る鼻先きに当り居るを以て一朝油断すれバ利爪忽ち頂門に向て下り来らんとすることはなり、「魯には虚無党あつて動もすれバ聖牀に傷けんとし」「英にはアイルランドの穩かならざるあり」「文明国にて内訌のなきハあらず」とされる。

此国の政事家をして真の「ピスマークの政略」「グラツトストーンの治策」「国に忠なるハワシントン」「軍に長せるナポレオン」「仁なる堯と文王」とを併せ持つ者たらしめば、理想的な者であるが、それらが「仮粧舞」であれば、「私かに杞憂に堪へざるもの」があつて、特に記録に留めたと言う。

最後に此国演説者の模様を紹介するとして、「演説ハ尤も世論喚起し人心を鼓舞するに功能あるものゝ如し」として、「ルーソーを以て自任するもの」「スペインを以て私かに比る人」「モンテスキウを友となし」「ギゾーを兄弟と為し」「慷慨の演説を試」みているが、「独醒子」が此国の演説に望むにハ演説毎に多人の演説者を出さず真のルーソースペインサー一人か二人位にて其間に多くの仮粧モンテスキウギゾー先生を加へざらん事を欲するなり。

この記録によつて、「独醒子」の仕事は終了、「此の如く記録に記し畢れバ見るとして聞くとして此国の風俗仮粧ならざるなけれバ独醒子唯嗟嘆するのみなりしが早や此国の風俗ハ大概視察して記録に留めたれバ如何にもして日本へ帰へり之を出版して一利を網せんと思ひ、大王に言上すると、別離の宴を徧々館に開いてくれて、その席で大王が挨拶して「思ふに我国の風俗人情ハ悉く之を視察いたせしならん如何に日本へ帰国の上ハ之を書に著はして世界万国に我国あることを知らしめ給はれかし」と言つたのに対して「独醒子」は次のように答礼した。

仰せ給ふごとく貴国の内外上下の情細かに視察仕り一々之を記録に留め候へバ本国へ帰へりし上ハ綸旨の通り微力を尽し奉るべし左りながら臣つらく、貴国の風俗人情を察するに其外面皮相ハ誠に太平無事にして上に賢臣良宰あり下に名士碩学ありと雖も窃かに察するに未だ之を以て万世不朽の基と思はれざるものあるに似

たり其故を尋ぬるに蓋し他ならず人心概ね外虚に走つて内実を省みず真相を後にして仮粧を先きにす之を矯正するを第一の急務と思へり而して内治既に整へバ更に外に對するの務をなさざるべからず按ずるに外国の貴国に向つて交通を乞ひ往來を為すもの悉く呑噬の志あらざるハなし然れども魯国を以て最も恐るべしとなす蓋し其昔魯のペートル帝が遺詔に全世界を併呑するの策を示せり而して魯国の君臣ハ常に之を守り其第四条に波蘭（ポーランド）ハ常に其人民を煽動し互に妬心を起さしめ以て之を分裂せしめざるべしと其策既に行はれたり其第九条に我境界ハ君士坦丁（コンスタンチンブル）及び印度に接近するを務むべし君と印とを領するものハ真に世界の主とならん此故に土耳其（トルコ）と戦ひ波斯（ペルシヤ）と戦ひ此兩國との戦争間断ならしむべしと而して魯ハ常に土に向つて戦ひを止めず近來又印度魯に依て英の羈絆を脱せんとすとの説あり豈に是魯の策に出づるなからんか又其十三條に我れ既に東方諸国に主として云々と云ひ其八條にハ北ハ東海に沿ひ云々の語あり魯の眼ハ未だ此国を知らざるの初めよりして既に此国に注ぎたり大王の今日に憂ふべきハ内治の次ぎハ則ち此魯国にあり幸ひに外臣が微衷を入れ給はんことを是れ臣が大王の恩遇に酬ゆる所以なり

ところが、この答礼を受けた大王が突然怒り出し、「ソレ此者を太平洋の中心に沈め来れ」と命令したので、「独醒子」を此の国に連れてきた「妖怪羊毫子」が走り寄つて襟元を掴み虚空へ連れ去ろうとしたのに驚いた「独醒子」が声を上げた、忽ち息を吹き返し彼は「日本東京なる神田の下宿屋の坐敷」に自身を見出したのである。「百物語の百番目に燈を消して帰らんとせしとき余に遽し其為めに鴨居の釘にかけ置きたる濡れたる筆にて領を撫で妖怪なりと驚き恐れ其まゝ氣絶」してしまい、友人の介抱でやつと息を吹き返した、その間「瞬時の間の幻」が「浮雲国」探索の実体だったのである。

「独醒子」の「浮雲国」体験が氣絶した間の「幻」であつたとの落ちは、勿論よくある形であり、特に問題とすべき新味はない。そして、「浮雲国」が日本を相対化する理想郷として設定されているのではなく、むしろ日本の現実の一面がそこに繰り広げられているのであるか

ら、これによつて当代の日本の問題が鋭く批評されているわけでもない。全ての問題が世間的レベルでの把握で終始しており、読者としてはもはや苦笑で応えるしかないようだ。「現代の妖怪」を捉えたものとしては、不満が残る。しかし、にもかかわらず、ここに指摘されている数々の「妖怪」ぶりが、そのまま今日の日本にも通底していることを認めざるを得ないであろう。その意味では愛花の舌鋒は核心を突いていたものと認められよう。

注1 「殿下閣下貴女及び紳士諸君 夫れ我日本国と西洋諸国との間に初めて交際を開きしより以来今日に至るまで僅かに一世紀の四分の一に過ぎず然りと雖も其僅少の歲月間我外人に対する友情好意は漸次に進歩して殆んど今日に至りては至る処として益す西洋諸国と交際を親密にし以て今日の友情好意を益す鞏固ならしめんとするの意を表せざるはなし。今や我国の浜に臨まるゝ外国貴賓は皆其の近隣諸国に至りて厚待を受べきの信認と同一の信を抱きて以て我国に臨れざるはなし然るに我帝都の中未だ斯る貴賓を請すべき適當の場所なきは皆人の知る所なり。されば此要に充てんが為めに此館を建築せんとせしは最初の目論見なりき。

さて工事も追々捗取るに従ひて爰に又一の事実ありて絶えず我輩をして斯く不期邂逅の外賓の為めに其招請の処を設けると雖も我国居留の外国紳士の為には未だ其備へなしとの思考を起さしめたり。此思考によりて我輩をして最初に目論見し規模を一層拡張せしめ而して終に其建築の竣工を告ぐるに至れり。されば此鹿鳴館は向後内外縉紳の共に相会し相交際し以て曾て経緯度の存することを知らず又国境の為めに限られざるの交誼友情を結ばしむる場となさんと決定せり。若し吾詞以て吾意を尽す能はざらしむるも我輩が此館に命ずる処の名に依りて以て我意を表するに足るべしと信ず我輩が詩経の句を仮りて此館に命くるに鹿鳴の名を以てしたるは各人の調和の交際を表章するの意にして此館に於ても亦同じく調和の交際を得ん事は我輩の期して且望む処なり。

(「東京日日新聞」明治16年12月1日)

2 「欧化主義の珍ばけものが競ひ集つて 伊藤首相官邸の大夜会 貴顕高官皆役者そのけの扮装」との表題で、仮装舞踏会の模様

が報じられている(「やまと新聞」明20・4・22)。「この仮装舞踏会の直後に伊藤博文首相と戸田氏共伯爵夫人極子との不倫の噂が囁やかれるようになった。某伯爵夫人が深夜、虎の門からハダシで逃げて来て人力車に飛び乗って駿河台に向かったという記事が新聞に載ったところ、その伯爵夫人は戸田極子であるという噂が拡まつた。安政四年に岩倉具視の長女として生まれ、旧大垣藩主の戸田氏共と結婚した、ダンスがうまく、美貌の三十歳の女ざかりの極子が好色家としても知られた伊藤博文に迫られたというのがその事件の顛末であった」(富田仁『鹿鳴館 擬西洋化の世界』白水社 昭59・12)。

3 「近頃最も驚きたるは鹿鳴館に於てレメニ一氏の大音楽会の催しありたるとき芸妓輩数名が大威張の御客様にて内外紳士並に宣教師などと同間同席にてありしこと是れなり。鹿鳴館は講談演説、舞ひ、躍りの浚ひ、席料さへ払へば如何様なることの催しにでも少しも構はず貸す如き一私有物とは違ひ、外国人との交際の為めに政府にて建てられたる堂々たる高尚なる建築なれば錢さへ出せば芸者でも娼妓でも立派な御客で入り来れると云ふ如き催しに此の建物を使用せしむるは実に大いなる濫用と言はざるべからず。これ全く催主の不注意に出でしものにて将来宜しく防ぐべきの弊なり」(外山正一『演劇改良論私考』丸善書店 明19・9)

「前参議の勝安芳は、このような政府の狂態を懼難して時弊二十一条を突きつけ、そのうちに「近來高官ノ方ガ、サシタル事モコレ無キニ、宴集夜会ニテ太平無事奢侈ノ風ニ相流レ候哉二相見ヘ候」。ときびしくきめつけ、また「舞踏会盛ニ行ハレ、付テハ淫凡ノ媒介トナル如キ風評モ下ニテ紛々窃ニ相伝ヘ候」。だから今少しく御控へ願いたいなど手きびしく難じた。」(社団法人霞会館編纂『華族会館の百年』筑摩書房事業出版 昭50・12)

4 本文では「凄憐」となっており、漢音の読みをルビとしてふると共に意味を左側に付けて読者の理解を助けている。こうした表記がどの程度流布していたかをつまびらかにしないが、開明期らしい表記である。

5 「洋の東西を論ぜず、世の古今を問わず、宇宙物心の諸象中、普通の道理をもつて解釈すべからざるものあり。これを妖怪とい

い、あるいは不思議と称す。その妖怪、不思議と称するものにはまたあまたの種類ありて、現今俗間に存するもの幾種あるを知らずといえども、しばらくこれを大別して二大種となす。すなわち、その第一種は内界より生ずるもの、第二種は外界に現ずるものこれなり。しかしてまた、内界より生ずるものに二種ありて、他人の媒介を経てことさらに行うものと、自己の身心の上に自然に発するものの別あり。ゆえに余は、妖怪の種類を分かちて、左の三種となさんとす。

第一種 すなわち外界に現ずるもの

幽霊、狐狸、天狗、犬神、祟、その他諸怪異

第二種 すなわち他人の媒介によりて行うもの

巫覡、神降ろし、人相見、墨色、卜筮、予言、祈祷、察心、催眠、その他諸幻術

第三種 すなわち自己の身心の上に発するもの

夢、夜行、神知、偶合、俗説、再生、癡狂、その他諸精神病

(井上円了『妖怪玄談』哲学書院 明20・5 ↓ 『井上円了・妖怪学全集、第4巻』(柏書房 平12・3)による。)

6 列挙されている人物は「帝王 ナポレオン 堯 文王 ワシントン

ト 政事家 ビスマルク グラツドストーン 学士 孔子

莊子 韓退之 柳宗元 朱熹 軍人 源義経 加藤清正 張飛

関羽 宗教家 釈迦 基督 マホメット ルーザー 民権家

ルソー スペンサー モンテスキウ ギゾー 医士 ヒポクラテス

ウイレルム、ハンター 耆婆 扁鵲 詩人 杜子美 白楽天 李

太白 隠者 陶淵明 蔽子陵 太公望 経済家 青砥藤綱

ミル ホーセツト アダムスミス ケーリー エーランド 陶朱

書家 王羲之 小野道風 歌人 山辺赤人 柿本人丸 定家

小説家 シエキスピーヤ リットン 羅貫中 曲亭馬琴 十返舎一

九 為永春水 画家 文晁明 趙子昂 巨勢金岡 浮世又平

狩野探幽 美男子 在五中将 美婦人 小野小町 三浦屋高

尾

7 ジュールスヴェルネ、三木愛花・高須墨浦訳『拍案驚奇 地底

旅行』(九春社 明18・2)。他にジュール・ベルヌの作品の翻

訳は、井上勤の訳で『月世界一周』(博文社 明16・6)、『亜非

利加内地 三十五日間空中旅行』(絵入自由出版社 明16・8)、  
『六万英里 海底旅行』(博文社 明17・2)などが出版されて  
いる。

8 坪内逍遙『小説神髓』(松月堂 明18・9 ↓ 19・4)の言説  
を意識していると思われる。また、二葉亭四迷「小説総論」(『中  
央学術雑誌』明19・4)も視野に入っていたと思われる。四迷の  
「浮雲」第一編が明治二十年六月の発表だから、「浮雲国」の名  
の由来もそこに認められるかも知れない。

9 末松謙澄、穂積陳重、森有礼、外山正一、依田学海らによる、  
「演劇改良会」の発足が明治十九年八月のことであった。